
絶対零度の異世界譚

リオール

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

絶対零度の異世界譚

【Nコード】

N52920

【作者名】

リオール

【あらすじ】

異能に目覚めた者を兵器として運用する世界。そんな世界のあ
る組織で使われていた異能者レインは、個人で持つべき力を超えた
とされ始末されそうになる。

だが、何の因果かレインは死なず異世界へと迷いこんでしまう。
剣と魔法が交錯するファンタジーの世界で、絶対零度の女王陛下フロストクイーン
と呼ばれたレインはどうやって生きていくのか。

主人公最強の異世界ファンタジーです。作者の妄想が主成分なの

で、作中には残酷描写や厨二病的表現が多々織り込まれる予定です。
苦手な方はご注意ください。

第一話 逃亡不能のバイオスファイア・1

『ブリーフィングを開始する』

『場所は旧世界連跡地、ニッドレイクの郊外。そこで建設途中の新
型シェルター・バイオスファイア』

『現在、その施設がネオスの連中に制圧されている』

『問題なのはその施設が既に稼働出来る段階にあるってことだ。そ
のバイオスファイアはある新エネルギーを使用して 正直なと
ころ、暴走状態にされて自爆されたらどれだけの被害が起こるか予
想出来ない。俺はざっと1億はくだらないと思うがね』

『というわけだ。君にはこれからこの施設を制圧して貰おうと思う。
やつらも本気だ、ネオスの能力者連中も居るはずだが……やれるだ
ろ？ 健闘を祈る』

上空15000フィートの高度を鋼鉄の翼が駆ける。

一度に十数人を収めれそうな輸送機だ。だが今はその中にたった
一人しか乗っていない。

それは一見ただけでは可憐な少女に見える。

否、どれだけ見つめようとそのイメージは覆らないだろう。

まるで人類の叡智をつぎ込んで造られたかのように整った顔。

雪のような真っ白な肌に、肌を負けず劣らずの真っ白な長い髪。

瞳はまるで氷のように光を反射する蒼。

背は160センチくらいだろうか。

ドレスを着ればダンスパーティーの主役を張れるだろうその子は、
しかしてその身を純白のトレンチコートで包み込んでいる。

その両手には武器らしいものを持っていないが まるで、戦地
に赴く兵士のように見える。

事実、その通りだった。

『降下予定ポイントに到着』

コックピットからの通信に、少女は立ち上がる。

後部ハッチがゆっくりと開き、身を突き刺すような冷氣が入り込んで微動だにしない。

「オープンチャンネル」

少女から短く発せられたその声は、聞く者全てに凍てつくような印象を与える。

『作戦を開始しろ、レイン』

若い男性の声が響いたと同時に、レインと呼ばれた少女はその身を虚空に投げた。

4

レインはこうして空を落ちるのは嫌いではなかった。

純粹に綺麗だということもあるが、何よりも開放感が良かった。

今は誰にも縛られていないと、錯覚することが出来る。

心地良さを感じている最中にも、地上は刻々と迫ってくる。

タイミングを見計らって、レインは能力を行使した。

キシキシと音を立てて空気中の水分が凝固する。

あっという間に、レインの背には巨大な氷の翼が展開されていた。

【零翼】その意思によって思うがままに動かせる翼は、人には有り得ない自在の飛行を実現する。

レインは豪快に翼を操り、速度を調整する。

新型シェルター・バイオスフィアの中央にレインは音もなく降り立った。

「……………ん？」

異常を感知したのはその直後だった。

音が無い。

話では能力者を扱うテロ集団ネオスが占拠していたということだったが、レインの体内に備え付けられた生体センサーには何の反応も示さなかった。

（……………ジャミング、もしくはステルスか？　ネオスにそんな技術があるとは思えないが……………）

「マスター。何かおかしい……………ネオスの連中が見当たらない」

通信で繋がっている先にいる自らの所有者にレインは事実を伝える。

しかし、返答は到底理解出来ないものだった。

『いや、おかしくない』

「……………は？」

『何もおかしくはない。予定通り、今回のターゲットは到着した』

レインの全身が泡立つ。途轍もなく嫌な予感が身を苛む。

と同時に、施設全体が稼働音を響かせる。

新型シエルター・バイオスフィアは、薄い皮膜状のエネルギー体を作り出しそれで全体を覆うタイプのまったく新しいシエルターだ。理論上、核の直撃でも100%揺るがないと言われたそれが、内と外を完全に隔離する。

本来は盾となるそれは今は檻となっている。即ち

『もはや貴様の役割は終わった。命令だ【そこで、死ぬ】』

ターゲットはレイン。自分自身なのだと、レインは絶望した。
内と外の完全な隔離が完了する。

開発途中と言っていたが、それは予想以上の安定を見せていた。
実際は既に完成していたのかもしれない。

だが、それを気にしている暇がレインには無かった。

「よう、お久しぶりじゃねえか……女王陛下あ？」

「あーあ、陛下は僕一人で殺したかったんだけどなー」

「愚痴を言っても仕方が無い　それにどうせ、貴方には無理ですよ」

「そうそう……4対1でも油断出来ないもの。ねー、絶対零度の女王陛下《フロストクイーン》？」

各組織が保有する、最強の戦力がレインの前に立ちはだかる。

「……さあ、処刑の時間だ女王陛下！！」「」「」

4つの刺客がそれぞれの意思を持って、女王^{レイン}へと襲いかかった。
^{ギロチン}

第二話 逃亡不能のバイオスファイア・2

「オラアッ！！」

最初に動いたのは赤髪の男。

物を遠くへ飛ばすように思い切り振りかぶった腕を動かす。

その軌跡をなぞるように5つの火球が遅れて発射される。

赤髪の男の力は爆炎を操る能力だ。生粋の戦闘狂で『葬炎』という異名で呼ばれている。

爆音と共に吹き荒れる炎。連鎖するように響いたそれはレインのいた辺りで炸裂した。

それと同時に赤髪を残して他の3人は散開する。

彼らは微塵も油断していない。相手がそれほどの化物だと自覚しているからだ。

その証拠にレインはその全てを防ぎきっている。

【零壁】レインは超低温で周囲の水分を凝固させそれを壁として防御していた。

だが、その壁の向こうに既にその姿はない。

「魔笛！」

「承知していますよ 鋼魔も合わせて下さい」

「はい」

葬炎の呼びかけに静かに応えた銀髪の優男は周囲から『魔笛』と呼ばれる探知能力者だ。

次いで返事をしたのは黒髪の女性。彼女は『鋼魔』と呼ばれ鋼鉄を操る能力を持っている。

魔笛は懷からフルートのような物を取り出すと、綺麗な音色を響かせる。

淀みなく周囲を響き渡るそれは、物体に接触した瞬間に歪な音色に変わる。

ガラスをひつかくような音が周囲から響く中、何も無いはずの上空から歪な音色が響いた。

氷を見に纏い、光を乱反射させることで擬似的な迷彩を得ていた女王の位置が割れる。

「そこだあ！」「そこね」

宙を駆けたのは矢尻がついた黒鉄の鎖と巨大な球体の爆炎。

何も無いはずの空間をまず鎖が貫く。とっさに身を逸らしたレインだったが零翼の片方を貫かれた。

そのまま逃がさないように鎖が翼をがんじがらめにする。

次いで迫る爆炎をレインは回避する術を持たなかった。

とっさに零壁を造り出して防御する。それと同時に翼の凝固を解除した。

「きゃっ！？」

あまりにも早いその判断に対応しきれなかった鋼魔が体のバランスを崩す。

レインはそのまま防御した爆炎の勢いを利用して葬炎らと距離を取った。

幸いスフィア内には剥き出しの鉄骨などの障害物には困らなかった。

その一つに背を預けたレインは自身の右腕を見る。

身に纏っていたトレンチコートは耐熱、耐刃、耐衝撃などの様々な攻撃を想定した代物だが、それが真つ黒に炭化している。勿論、

中の右腕も無事ではない。

「この義体……思った以上に使いづらいな」

だが、レインはまるで痛みを感じていないかのように独りごちる。事実、本来なら感じるはずの痛みをレインには殆ど感じなかった。

兵器として運用される異能者の体は普通の人間の物ではない。

最先端のナノマシンを体内に飼う有機的人工義体だ。

それはいくらかでも変えの効く体であり、脳さえ無事ならどれだけ傷つこうとも問題ない。

ナノマシンはセンサーやレーダーの役割を果たすことも出来る。

異能者の体を義体に置き換えるのには3つの目的があった。

『身体能力の向上』『身体耐久度の向上』そして『異能者の支配』この3つだ。

『身体能力の向上』はそのままの意味だ。筋力や体力などを増強する。

『身体耐久度の向上』は義体としての耐久度だ。異能者は能力の成長につれて人の身では耐え切れないほどの力を発揮出来るようになる者もいる。その運用に耐えるため、全身を義体にする必要があるのだ。

『異能者の支配』は義体にする際に施される洗脳のようなもので、これを用いて各組織は異能者を扱う。主人として登録された者の命令は絶対服従だ。マスターが「死ね」と言えば絶対に死ななければならぬほど強制力を持つ。

良質な義体は、増強の度合いが大きく耐久度が高い。それだけでなく、長持ちする兵器が造れる。

と言っても義体が限界に近づけばまた新しい義体に移し替えればいいだけなので、普通は耐久度を気にする必要は無い。

だが、レインだけは違った。

つい先日、能力の成長を経たレインは既に数回の能力行使で義体が崩壊するレベルにまでなっている。

故に特注したのが現在の義体だった。

身体能力向上を一切しない特殊な義体。その代わり耐久度がずば抜けて高い。さらには新エネルギーを使用した『ある機能』を持たせられているとレインは伝えられていた。

「……おお、すごい。治った」

炭化もしくは重傷の火傷を負ったはずの右腕が綺麗さっぱり治っていた。

『ある機能』とは、すなわち再生能力。

普通の義体を持つ数十倍のそれを、新エネルギーで編み出しているらしい。

新エネルギーが一体何なのか、専属の義体技師に聞いてみたが国家機密と言われていた。

「休憩終了のお知らせ」

「っ!!」

突如として背後にあった障害物からナイフが生え、レインへと襲いかかる。

レインはそれを前に跳んでして躲した。

「んっふっふ。びっくりした？　びっくりした？」

障害物をぬるりとすり抜けて現れたのは金髪の少年。『死神』の異名で呼ばれる物質透過能力を持った異能者だ。

瞳を爛々と輝かせて問いかける『死神』にレインは凍てついた視

線を投げる。

「全然ダメ。声かけて奇襲とかバカか？」

「しょんぼり……でもさ、直ぐに終わっちゃったらつまらないですよ？」

何時の間にか接近していた他の3人も、それはそうだと言わんばかりに笑う。

レインはそれを、愚かしいと冷笑した。

「クズが」

たった一言でその場の空気が変わる。

襲撃者全員の中に渦巻くのはこれまでに受けた屈辱に対する怒り。それと同時に感じたのは 底知れない恐怖。

「ここでオレは死ぬようだから……折角だし一矢くらい報いさせてやろう、なーんて思ったがやめだ、やめ。お前らじゃ一生続けてもオレには勝てん」

「はっ……何を訳の 言っ……」

異変に気づいたのは4人同時。だが、それはもはや手遅れとなったときだった。

義体がい思い通りに動かない。能力が使えない。

手足も、頭も、唇も、鼻も、凍ったように動かない。何故か目だけが動く。

さらに異変は周囲へと影響を及ぼす。バイオスフィア内の至るところが音を立てて氷結を始めていた。

「何が起こっているか理解出来んだろう？」

目だけを一生懸命にギョロギョロと動かす4人を眺めながらレインは冷笑する。

「絶対零度といえど凍らない物は山ほどある。そう、例えば 電気。何故ならこれは現象だからだ。物理的に凍るはずがない」

やがて、周囲の凍結が4人の体にも及んでいく。

本来ならこの時点でナノマシンが作動するはずなのだが、その気配はない。

「だがもし、凍らせることが出来たなら 現象を凍てつかせることが出来たならば。電気信号無しで動くことの出来ない人間、もしくは義体に…… 負けるはずがない！ フフ、フフフ アハハハハハ！」

哄笑が凍てつく世界に響き渡る。

脳だけがその氷結を逃れている中、4人全員はかつて無いほどに後悔し絶望していた。

「これがオレの力。『アフソリユート・ステイシア絶対零度の女王』だ」

もはやその声を聞く者は居ない。

凍てついた檻の中で、レインはただ一人立っていた。

「はあ……………虚しい」

しんしんと真っ白な雪の降り始めた中、レインはごろりと寝転がる。

そこでようやくレインは異常に気づいた。

バイオスフィアが暴走状態になっている。

内部で派手にやりすぎたからか。はたまた暴走するように細工されていたか。

レインにはどちらでも良かった。既にマスターから死を命じられていたレインには、自殺だろうと他殺だろうと死ねば問題無い。

他組織の異能者を刺客としたのは戦力を削ぐためだろう。だからマスターは『そこで、死ね』としか命じなかったのだとレインは考えていた。

雪の白よりも、もっと白い輝きが増すのをレインはぼうつと見ていただけだ。

「オレ一人には過ぎた墓標か……」

レインは考える。暴走したらどれだけの被害が出るのだろうか。自分なら、それを止めることが出来る。現象すら停止させる絶対零度なら、今すぐに。

「やる気なんて無いけど」

輝きが視界を埋め尽くす。自分の体を白が塗り潰す瞬間、レインの口から言葉が溢れる。

それは、何処か悲しげな笑みと共に、無くなりつつある空間に響いた。

「ハハッ……来世じゃ、普通がいいな」

その言葉を遺言に、輝きが全てを塗り潰す。

そうして フロストクイーン 絶対零度の女王陛下と呼ばれた兵器、とつたうれいん 凍堂零雨はこの世界から消滅した。

第三話 白銀異境のプロローグ

「うつひゃー！　すごいっすよ、これ全部本物です！　雪ですよ雪っ！　俺初めて見ました！」

「ちいつと落ち着けやロロア……気持ち分かんないがな」

幌馬車から顔を出して身を乗り出す青年　　ロロアは本来見れるはずのない光景に年甲斐もなくはしゃいでいた。

辺り一面は雪で出来た白銀の世界。本来は緑豊かな森だったそこは、突如として現れたこの異常な世界に塗り潰されていた。

原因は不明。3日ほど前に近隣の村から首都へ報告があり、急遽調査隊が結成された。

だが、ここにいる彼らは調査隊ではなかった。

「ガイノの言うとおりだ。もしかしたら魔族の侵攻かもしれない。……まったく、姫様には困ったものだよ」

リーダー格らしき女性が声を上げる。幌馬車に乗っているのは御者を除けば彼女を含め3人だ。

彼らは王族親衛隊の3人。ここに居るのは忠誠を誓った姫君が発した言葉に起因する。

『へえ……あんなところに雪が降ったの？　じゃあ……行って調べてきなさい。何か面白そうな物があつたら持ってきてね？』

という軽いノリのものだった。

金髪ショートヘアの女性　　ユリアはこの気まぐれに言いようもない頭痛を覚えていた。

それを見たガタイの良い男　　ガイノと呼ばれた彼は豪快な笑み

を浮かべて言う。

「なあに、大したことは無いだろうよ。見る限りただ寒いだけだ」

「現れた当初はかなりの冷気を発していたらしいけどね……それこそ、魔物が息絶えるほど」

確かにその通りだった。

最初の頃は、近隣の村へも身を刺すような冷気が及んでいたのだ。幸いにして犠牲者は無し。家畜に幾分かの被害が出たのみに収まった。

この辺りの雪をどければ、それこそ至る所に魔物の凍りついた死骸が見つかるだろうとユリアは考える。

「ロロア、そっぴゃお前調査隊の連中と何か話してたじゃねえか……何か見つかったとか言ってたか？」

「作成された周辺の地図を貰ったんですよ。そうそう、この異常気象って中心があるらしいっすよ」

「ほう？」「なんだと？」

ガイノとユリアの二人はロロアが懷から取り出した地図を額をくつつけるようにして見る。

そこには森の大まかな範囲と、ポイントごとの状況が細かに書き込んであった。

「ここからちょうど円を描くような範囲ではまだ雪が降っているそうですよ。調査隊は雪が収まってから調査に入るって言ってました
何が起こるかわかりませんかからね」

「よし、中心に行くぞ」

「ええ！？」

ユリアの言葉に驚いたのはロロアだけだった。ガイノは当然といったように頷いている。

「隊長……何かいるかもしれないですよ？」

「スノウドラゴンでも居れば近隣に被害が及ぶのは必至だろう。それなら、私たちが先に踏み込んでいたほうがまだろ？ それに、何も居なければ堂々と大手を振って帰れるし」

「まあ……そうっすね。何も居ないことを祈りますけど」

「んな心配すんな。いやしねえよ……ただの異常気象だ」

ユリアは馬を操る御者に目的地を伝え、そこに行くように指示した。

「うお、本当だ……雪降ってら……」

「確かに、こいつあすげえ」

「うむ……なかなか綺麗だな」

彼らは三者三様の様子で歩く。ガチャガチャと、歩くたびに鎧が音を立てるがその音すらも白銀の世界に飲み込まれていくような錯覚を与える。

彼らは不足の事態に対応できるよう馬車から降り徒歩で移動していた。

異常気象の中心らしき場所まで一行はそう時間もかからずに辿り着いた。

目の前に広がった景色に3人はほろりとため息をつく。

決して広いとは言えないその空間は、それだけで一種の芸術にも見える。

氷だ。木々の葉の一つ一つまで氷で出来ている。

もとは緑豊かな泉だったであろうその場所は、たった3日で白銀の異境と化していた。

そこは他に比べて異常なほどの冷気に満ちていた。

耐寒防護の魔法具を身につけていなければ、体の端から凍りついていたかもしれないと彼らは身震いした。

未だにしんしんと雪が降る中、『それ』に初めて気がついたのは
ロロアだった。

「た……隊長。俺、夢……見てるんですかね」

「……何を言っている？」

「どうしたロロア。寒さで頭イツたか？」

「あれ……」

そう言つてロロアの指差した先、初めは何も変わらない光景だと思えたそこに、『それ』は在った。

「もしかして　女の子じゃないっすか？」

半ば雪に埋もれるようにしてあった『それ』はまるで人形のような
だった。

本物の雪と変わらないほどに白く美しい髪と肌。

とことん美を追求したかのような造形の顔。

唯一違和感があるとすれば、それは兵士が着るようなコートを身
につけていることだけだろうか。

「お、おいっ！！」

真っ先に駆け出したのはユリアだった。

雪に埋もれた人形のような少女を優しく抱き起こす。

ユリアはその異常なほど冷えた体を検分する。

心音は弱々しくも動いているようだ。だが、やはりというか目覚める気配はない。

「隊長……」

「心配するな、生きている…… ロロア、お前は先に戻って調査隊に連絡だ。ガイノ、この子を頼む。一刻も早くこの森から連れ出して温かいところへ。私はこの子の手がかりがないか辺りを調べてから戻る」

「了解!!」

こうして、姫の気まぐれによるこの調査は思わぬ拾い物をする事になった。

この後、彼らは一向に目覚める気配の無い少女を連れて首都へと戻る。

その少女こそが後に、歴史を語る際には欠かせない役者になると知らずに。

絶対零度の異世界譚が、今 幕を開けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5292o/>

絶対零度の異世界譚

2010年10月28日01時07分発行